



沢田内科医院 ニュースレター

第 135 号

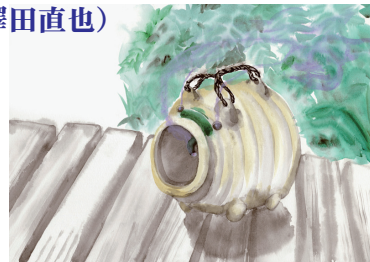
灼熱の2023年夏、ねぷた、そしてコロナ再び (澤田直也)

世界的に暑い夏です。12万年で一番暑い7月とのニュースもありました。熱中症をはじめ、気候の変化による体調不良の患者さんが毎日受診されています。「前はこれで大丈夫だった」が通じない状況になってきたと理解する必要があるようです。

7月の最終週は新型コロナウイルス感染症が2類相当から5類に変わってからコロナ陽性患者数が最も多い週になりました。朝から発熱外来の問い合わせの電話も多いです。PCR検査をすると半数あるいは多い日で90%以上の方が陽性になっています。7月30日(日)の在宅当番医のときに発熱で訪れた患者さんは1名を除いて全員コロナ陽性でした。

つまり現在、風邪症状がある人は50%以上の確率でコロナであるということです。子供たちは夏休み、そしてねぷたまつり、その後の飲み会、同窓会、帰省での家族の集まりなどで爆発的に感染者が増える可能性があります。65歳以下の特に持病のない方にとってはほとんどが通常の風邪症状ですが、問題は高齢者、持病のある方の重症化です。再び医療逼迫がおこるおそれがあります。医療逼迫で怖いのが、コロナ以外の疾患の対応ができなくな

ることです。通常診療していて入院が必要だと判断し、健生病院や弘前総合医療センターに依頼しても受け入れてもらえなかったり、熱中症や交通事故のため救急車で運ばれても受け入れできない恐れがあるということです。新聞やネット、テレビなどで感染拡大の状況を判断しながら生活する必要があります。



と、他人事のようにニュースレター原稿を書いていたら8月8日、私自身が発熱し、約半年ぶり通算3度目のコロナ陽性となりました。お盆休み前で受診ラッシュの時期に出場停止処分となってしまったため、弘前大学消化器内科に依頼し代診の先生をお願いしました。今回は速水史郎先生と福德友香里先生に手伝ってもらいました。毎回急なお願いにもバックアップ対応していただけるので感謝しかありません。

今回も子供からの家庭内感染、あるいは前の週の弘前市医師会ねぷた運行に関連して(それ以外外出していないので...)感染した可能性が考えられました。私はワクチンの副反応が長引くため3回しかワクチン接種はしていません。頭痛や発熱はありましたが、過去2回より軽症ですみました。他の病院の様子をうかがっても、コロナ陽性者は増えているものの入院になるような重症は少ないようなのでウイルスが弱毒化してきているのかもしれませんが。

東目屋中学校の職場体験実習

7月5日に東目屋中学校の職場体験実習がありました。2年生を対象に市内の様々な業種の仕事を体験してみようという趣旨の行事です。2年生は全員で18名とのことでした。資料をみますと当院の他には調剤薬局、せんべい屋さん、お酒屋さん、ドラッグストア、デパート、美容室と多彩でした。前の週に実習にくる学生さんから受け入れ挨拶の電話をもらうところから実習がはじまりました。初対面の大人の職場への電話でしたのでかなり緊張している様子でした。

当院には小枝月夢(らいむ)さん、西澤悠希(ゆうき)さんの二人がきてくれました。午前中だけの診療日でしたので、朝から薬局で薬をつくったり、看護師さんの処置を手伝ったり、内視鏡などの検査を見学したりと駆け足で時間が過ぎていきました。短い時間ながら実習中も積極的に質問をしていました。その後、大学病院からの研修医立崎先生、師長と一緒に学校生活や興味を持っていることなど話ながら昼食を摂りました。食後には質問タイムがありました。仕事をするた



めに大切なことは何かなど、あらためて聞かれるとドキッとするような質問が並んでいました。

ニュースレターのバックナンバーを紐解きますと、かつて四中で職場体験実習を始めたころは4日間連続で受け入れていたようです。やはり最初は緊張して「借りてきた猫状態」なので、遠慮なく質問できるくらいになるにはそれくらい時間が必要との判断でした。最近はカリキュラムの都合上、あまり時間がとれないとのことでした。家庭や学校を離れて社会を体験することは、将来を考えること以外にも現在を生きるヒントに満ち溢れていると思いますし、純粋な目で仕事をみてもらうのはこちらにとっても刺激になります。今後も医療者の実習はもちろん、中学生の職場体験実習も積極的に受け入れていくつもりです。



本当はちゃんとマスクをとって記念撮影するつもりでしたが、当日お迎えのバスの時間が迫ってバタバタしているうちに撮るのを忘れてしまいました。痛恨のミスでした。あとで担任の阿部先生が実習の時に撮影した写真を送ってもらい掲載しました。

弘前大学医学部附属病院研修医 立崎善郎 先生

皆さん初めまして、弘前大学医学部附属病院から沢田内科医院へ1ヶ月間の研修に来ました初期臨床研修医の立崎善郎と申します。こちらの文章は沢田内科医院のウェブサイトにあるニュースレターへ掲載して頂けると伺っており、通院されている患者さんはもちろん、患者さんのご家族やこれから来院を

考えていらっしゃる方、近隣病院の職員や私のように研修に来る予定の研修医、医学生、看護学生の皆さんなどたくさんの方の目に留まると思います。大変恐縮ですがこの場をお借りして私の自己紹介や今回の研修での感想などを述べさせていただきます。

私は小さい頃に沢田内科医院のご近所である常盤坂や茂森新町に住んでおりました。その後青森市へ引っ越し、紆余曲折を経て弘前大学医学部を卒業しました。現在、初期研修医2年目として沢田内科医院にて研修しており、故郷に帰ってきたという気持ちでした。有り難いことに子どもの頃の私を覚えていて下さり、お声掛けして頂いた患者さんにもお会いすることができました。日々の研修では、診察に検査に発熱外来に院内を駆け回る直也先生の後ろを必死に追いかけて行動して少しでも多くのことを吸収できるように勉強させて頂きました。また、直也先生のご指導の元で問診・診察も行わせて頂きました。沢田内科医院の患者さんは美彦先生・直也先生に診てもらいたいから通院しているという患者さんが非常に多く、その中で研修医の自分が診察させて頂くことは恐れ多く、患者さんの不利益にならないようにしっかりと行わなければならないという気持ちで診察させて頂きました。この場をお借りして診察させて頂いた患者さん、ご指導頂いた直也先生、診察のサポートをして頂いた看護師さん達へ感謝を申し上げます。



さて、ここで初期研修医とは何かについて少し説明します。医師になるためには大学医学部へ入学後6年間のカリキュラムを卒業し、卒業年度の2月に医師国家試験を受験する必要があります。晴れて合格すれば医師免許を取得して医師となります。そして4月から最初の2年間は初期研修医として、内科・外科・小児科・産婦人科・精神科・救急科などさまざまな診療科を順番に周りながら、各科の指導医の元で専門性の高い研修や医師としての基本を学んでいきます。2年間の初期臨床研修を終えると、大多数の研修医は臨床医としてそれぞれの専門科を選択していきます。現代の医学は非常に高度で専門性が高く各領域に細かく分かれています。そのため患者さんが病院受診する際も、症状や疾患ごとに内科を受診するよ

うに言われたり、整形外科を受診するように言われたり、耳鼻科を受診するように言われたりするのです。「餅は餅屋」「仏の沙汰は僧が知る」「船は船頭に任せよ」「田作る道は農に問え」「弱くても相撲取り」ということでしょう。

ここで一つの問題が生じます。体調が悪くなり病院受診を考えた際に、その症状が何科の領域なのか患者さんが考えても見当つかないという事態が発生する場合があります。症状に苦しみながらもその難問を考えなければならないのでしょうか。答えの一つは自分の『かかりつけ医』を持つことです。困ったらずはかかりつけ医を受診して相談する。かかりつけ医の診察後、必要に応じて適切な科へ橋渡しすることが地域医療のあるべき姿と考えます。今回

の研修中も現在治療中の病気とは別に、「先生ついでに相談したいんだけど…」と今困っている症状について患者さんが相談する場面に何度も出会いました。直也先生はどのような症状、疾患に関しても相談に乗り、判断して問題解決へ努力されます。このような姿勢が患者さんに伝わるから

でしょうか、研修初日から「沢田内科医院以外どこの病院にもいきたくない。」「入院するならここがいい。」「最期はここで。」という沢田内科医院の大ファンである患者さんに何人も出会い、良い意味で非常に驚きました。

前述した通り、研修医である私も近い将来には専門科を選択しますが、専門の道に進んでもこちらで学んだように患者さんからの相談事に快く乗ることができる、美彦先生・直也先生のような医師でありたいと強く感じました。最後になりましたが、研修期間中にお世話になりました沢田内科医院の職員の皆様に心より感謝をお伝えしたいと思います。大変お世話になりました。ありがとうございました。

弘前高校開校記念講演会 その2 (澤田美彦)

ニュースレター132号にも書きましたが、令和4年9月に弘前高校開校記念講演会で後輩に話をしてきました。その内容が弘前高校鏡ヶ丘同窓会報に載りました。講演の打ち合わせの時に、講演会の内容を同窓会報に載せるので、その記事を誰か友人に書いてもらえないかとの話がありました。そこで高校1年と3年の2年間同じクラスだった工藤和夫君にお願いしました。長く高校で数学を教えていましたし、弘高にも勤務したことがありますのですぐに引き受けてくれました。

高校時代、私は論理的な展開で物ごとを進める数学が好きでした。その当時、「大学への数学」という月刊誌がありました。点数を取る受験のための雑誌ではありません。今のように空欄を埋める問題ではなく、論理的に展開して解答を引き出す問題ばかりでした。友だちと一緒に勉強したのですが、この問題をどの視点から攻めようかという感じが強く、やらされ感が全くありませんでした。

毎月問題が出題されるのですが、分野別ではなく解き方は自由で自分が考えた方法で問題を解いて提出します。きれいな解き方をすると点数が高くなり、減点というよりは加点して採点しているのだと思いました。私も成績優秀者として名前が載ったことがありました。

ある小学校では、その学年までに習っていない方法で算数の宿題を解いたり、習っていない漢字を使って文章を書いたりすると親が注意されるとのこと。満点から減点するのではなく、「大学への数学」のように他の人とは違う視点からきれいな解き方をすると加点されるようにして評価するともっとやる気が出てくる子どもが多くなると思うのですがどうでしょうか。

沢田内科医院の職員が漢字検定4級の勉強をしていたことがありました。たまたま西目屋小学校の校長先生が検診で受診していてそれを見て、西目屋小学校では漢字検定をやるようになりました。多分、学年に関係なく漢字の勉強をしているのでしょうか。

(3) 第35号

鏡ヶ丘同窓会報

令和5(2023)年6月1日

冒頭の五言絶句は、津軽出身で明治のジャーナリスト陸羯南が故郷の若人に奮起を促したものである。昭和46年卒業の我々は1年生の時、当時の校長小田桐孫一先生から教わった。東大卒で中央でも活躍された校長の講話の内容は難解なものであったが、各先生方が授業をさいて分かり易く説明してくれたこともあり、心に響くものであった。澤

「名山名士を出だす……」このスライドから澤田美彦医師による記念講演が始まった。会場である第一体育館には、山上同窓会長と2,3年生と教職員が入り、1年生はオンラインでの参加である。

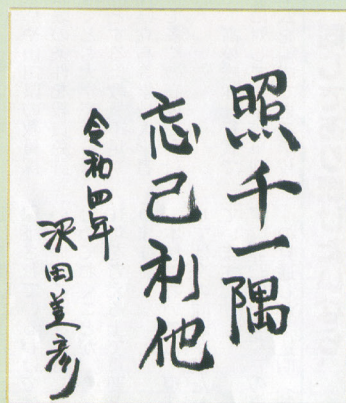


澤田美彦氏
後輩への熱きエール

工藤和夫(昭和46卒)

開校記念講演を聞いて

卒業生へのメッセージ



《講師》澤田 美彦氏
弘前市医師会会長 沢田内科医院前院長

【略歴】

昭和27年中津軽郡西目屋村生まれ。弘前高校・弘前大学医学部を卒業し、弘前大学大学院修了(第1内科)後、昭和57年アメリカメーヨークリニックサーチフェローに勤務。帰国後、昭和59年から弘前大学医学部第1内科、昭和63年から青森県立中央病院消化器内科、平成4年から弘前市立病院内科に勤務後、平成7年に沢田内科医院を開業。現在は、弘前市医師会会長、弘前大学医学部同窓会副会長理事長など様々な役職を務める。

田医師は、「天下の賢」とは「一隅を照らす人」であり、「その人がいなくては物事が停滞して困るとい

う。一方彼は、人材育成にも意欲的に取り組んでいる。同院で働いている看護師等スタッフのスキルアップは

もちろん、弘前市医師会看

道されている。

「試みに問う厳城の下 誰

人か天下の賢」後輩に対し、開業医として地域医療になくはならない澤田医師の熱い思いが強く伝わった開校記念講演会だった。

「長期的な目標を決めて進むことで、今何をしなければならぬか分かる」と目標の修正は、挫折ではなく「試みに問う厳城の下」と述べ講演を終えた。今回、在校生に対して、

「彼の出発点がある。講話は開業医としての実践した事へと進む。弘大医学部大学院を修了してから、アメリカの総合病院や県中央病院などに勤務し、43歳で沢田内科医院を開業した。内科医としてがん検診の重要性をあげ、内視鏡検査を用いての早期発見早期治療に取り組む、数多くの成果を上げている。現在のパンデミック以前から、麻疹・インフルエンザなどの感染症と向かい合い、新型コロナウイルスに弘前市医師会会長として積極的に対応した。行政にも働きかけ、いち早くオミクロン用ワクチン接種をスタートさせたことはNHK全国版でも報道されている。